COVID-19感染症に対する当施設外来透析患者の意識、行動調査

渡邉明日香、佐藤輝子、渡部瑞恵、土田カヨ子、田口一美、河村美貴子、勝又麻子、
水木麻衣子、吉原優太、齋藤静雪、伊藤彩佳、染谷早苗、小野千香子、佐藤良延
(医)淞秋会 おのば腎泌尿器科クリニック

Survey of awareness and behavior to COVID-19 Infection in dialysis patients

Asuka Watanabe, Teruko Sato, Mizue Watanabe, Kayoko Tsuchida,
Hitomi Taguchi, Mikiko Kawamura, Asako Katsumata, Maiko Mizuki,
Yuuta Yoshiwara, Shizuki Saito, Ayaka Ito, Sanae Someya, Chikako Ono,
Yoshinobu Sato
Onoba Nephro-Urological Clinic

＜諸言＞

新型コロナウィルスの感染拡大で、外出や行動制限等による患者への影響を把握するため、2022年４月にアンケート調査を行った。その結果、患者の精神面の数値化、表面化をしたことで、感染症拡大による精神的影響が一部の患者に存在することが分かった。目に見える患者の状態や、会話だけでは把握しきれない部分もある事をふまえ、患者理解、状態把握を行う必要があると2022年10月の日本腎不全看護学会において報告した[1)]。

今回、再度アンケート調査を行い、患者の感染に対する意識の変化を把握し、看護援助を再検討した。

＜対象と方法＞

①看護援助について話し合う看護カンファレンスを開催した。

②当施設外来透析患者60名に2022年４月と同内容の選択記述式アンケートを施行した。アンケート実施期間は、2022年10月17日から10月25日に実施した。

精神健康度のスクリーニングには、K６[2)3)4)]ストレスチェックを用いた。

アンケートの内容は、厚生労働省援護局障害福祉部精神・障害保健課、「新型コロナウイルス感染症に係るメンタルヘルスに関する調査概要について」[5)] をもとに作成をした。

③４月と10月のアンケート結果を比較し看護援助を検討した。

＜倫理的配慮＞

対象者には、調査目的、方法、調査の協力は自由意志に基づくものであり、調査報告を断っても

不利益が生じないことを説明した。アンケートは無記名とし、個人が特定されないこと、またアンケート結果用紙は研究発表後シュレッダーにて破棄することを説明した。

＜結果＞

2022年４月のアンケート後、結果を基に看護カンファレンスにて看護援助についての意見交換の場を設けた。

「ストレス緩和のため、感染予防対策をしたうえでレジャーや散歩などの軽い運動を生活の中に取り入られるような関りをした。」

「話を聞くだけでもストレス発散になると思い、バイタルチェック時に積極的に会話をするようにしている。」

「患者個々のコロナに対する認識度の違いで結果に差が出てくるので過剰な恐れを抱かないように対応していかなければならないと思った。」

「隔離透析の期間中、日が経つにつれ、患者のストレスが大きくなることがあったが、不安の訴えの傾聴、気持ちを共感し対応した。」

「隔離透析に対して、理解がある患者もいれば、理解が難しい患者、不満や、やりすぎと訴える患者もいて、それぞれ理解してもらうための説明が必要と感じ、個別的対応を心掛けた。」などの意見があった。

2022年10月に再度アンケートを施行し、60名中57名から回答があった。アンケートの結果を４月の結果と比較した。

Ｋ６ストレスチェックでは、４月は９点以上が15名（28.3％）、13点以上が６名（11.3％）だった。10月は９点以上が７名（12.２％）、13点以上が１名（1.8％）で減少がみられた（表１）。

表１　Ｋ６ストレスチェック

2022年4月				2022年10月			
0点	4名	7.5%	（男性2名　女性2名）	0点	11名	19.2%	（男性8名　女性3名）
1点	6名	11.3%	（男性4名　女性2名）	1点	5名	8.8%	（男性4名　女性1名）
2点	6名	11.3%	（男性4名　女性2名）	2点	10名	17.5%	（男性7名　女性3名）
3点	5名	9.4%	（男性5名　女性0名）	3点	4名	7.0%	（男性3名　女性1名）
4点	3名	5.7%	（男性2名　女性1名）	4点	5名	8.8%	（男性3名　女性2名）
5点	2名	3.8%	（男性2名　女性0名）	5点	2名	3.5%	（男性2名　女性0名）
6点	3名	5.7%	（男性2名　女性1名）	6点	11名	19.2%	（男性6名　女性5名）
7点	5名	9.4%	（男性4名　女性1名）	7点	1名	1.8%	（男性1名　女性0名）
8点	4名	7.5%	（男性2名　女性2名）	8点	1名	1.8%	（男性1名　女性0名）
9点	**2名**	**3.8%**	**（男性2名　女性0名）**	**9点**	**2名**	**3.5%**	**（男性1名　女性1名）**
10点	**4名**	**7.5%**	**（男性3名　女性1名）**	**10点**	**1名**	**1.8%**	**（男性0名　女性1名）**
11点	**2名**	**3.8%**	**（男性2名　女性0名）**	**11点**	**2名**	**3.5%**	**（男性1名　女性1名）**
12点	**1名**	**1.9%**	**（男性1名　女性0名）**	**12点**	**1名**	**1.8%**	**（男性1名　女性0名）**
13点以上	**6名**	**11.3%**	**（男性1名　女性5名）**	**13点以上**	**1名**	**1.8%**	**（男性1名　※22点）**
13点　2名（女性）　14点1名（女性）　15点（男性）							
19点（女性）　21点（女性）							

９点～１２点：気分不安障害
１３点以上：重度精神障害

以下、アンケート結果を示す。

ストレスを感じている度合いを１（ストレスが少ない）から10（ストレスが多い）を選択してもらった。５以上が４月の43.4％から、10月は22.8％と減少がみられた（表２）。

表２　過去１か月間どの程度ストレスを感じましたか

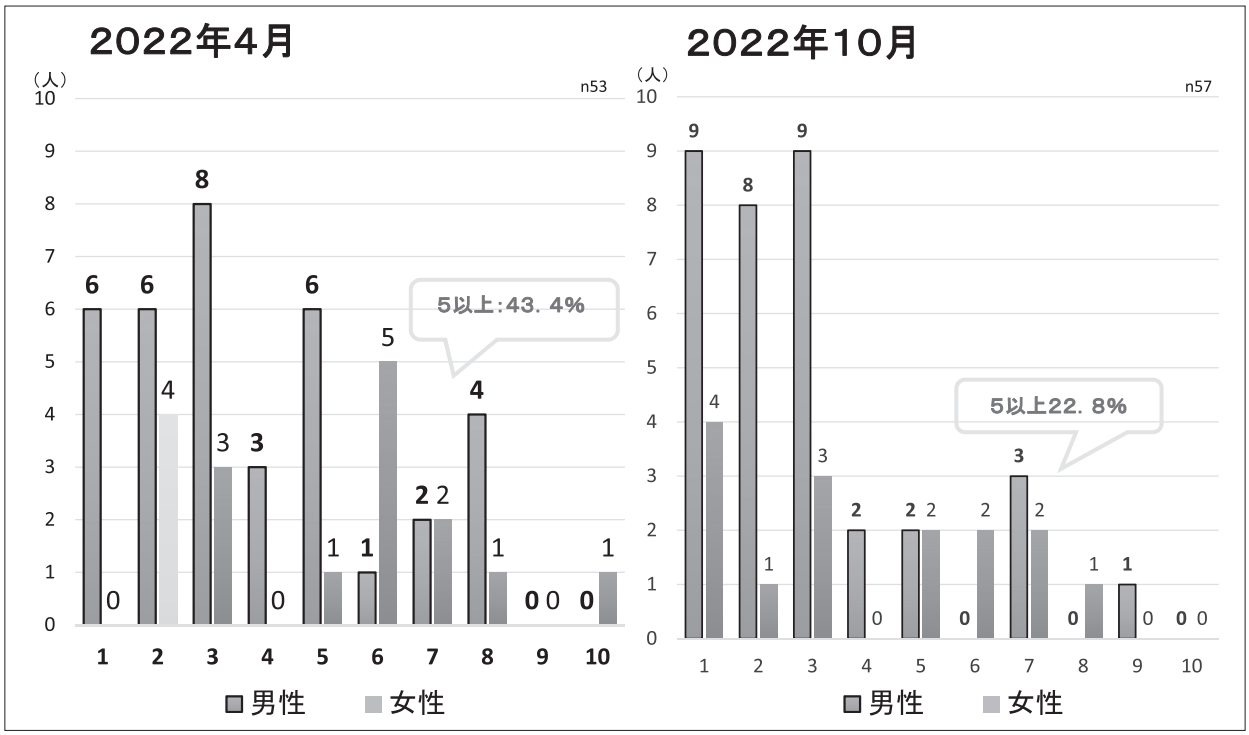
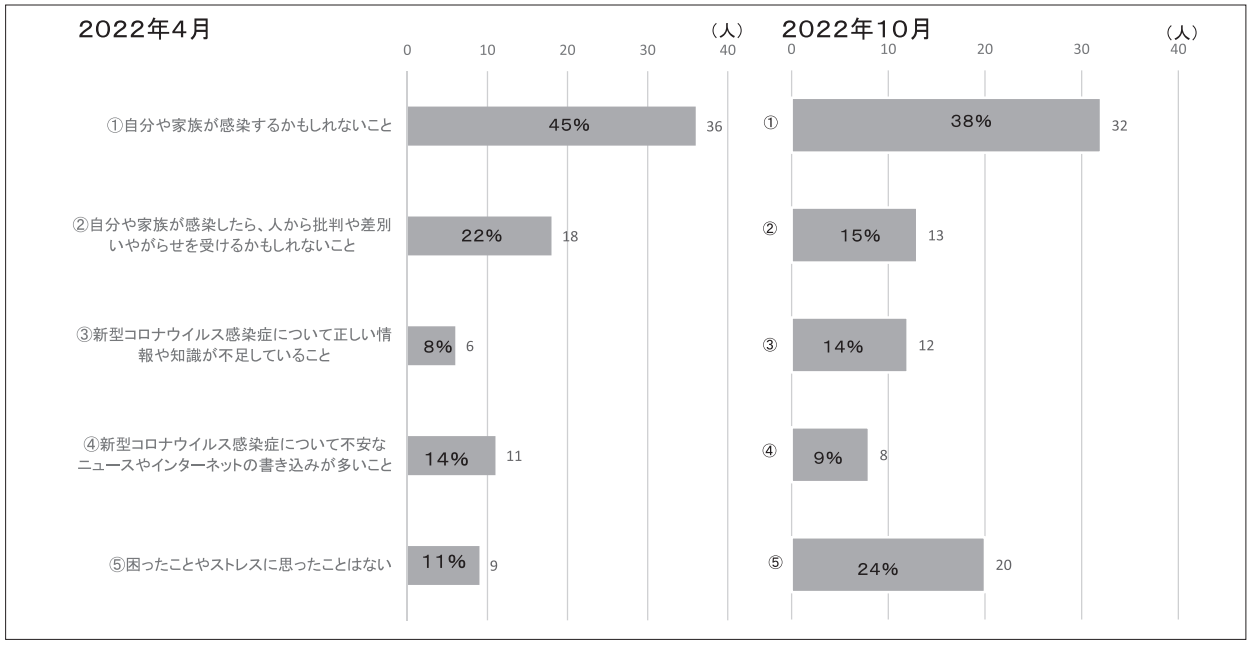


表３　過去１か月で、不安に思ったこと、困ったこと、ストレスに感じたことはありましたか
（複数回答）＜感染や感染症の情報に関すること＞



不安に思ったこと・ストレスに感じたこと、の質問では、感染や感染症の情報に関することでは４月、10月ともに①の自分や家族が感染するかもしれないこと、が一番に多く、⑤の困ったことやストレスに感じたことはないが、10月は24％に増加した（表３）。

生活に関することでは、②の旅行やレジャーができないこと、③の自宅のいる時間が増えることで運動量が減り体力が低下することが多かった。⑤の困ったことやストレスに感じたことはないが10月は25％に増加した（表４）。

表４　生活に関すること（複数回答）

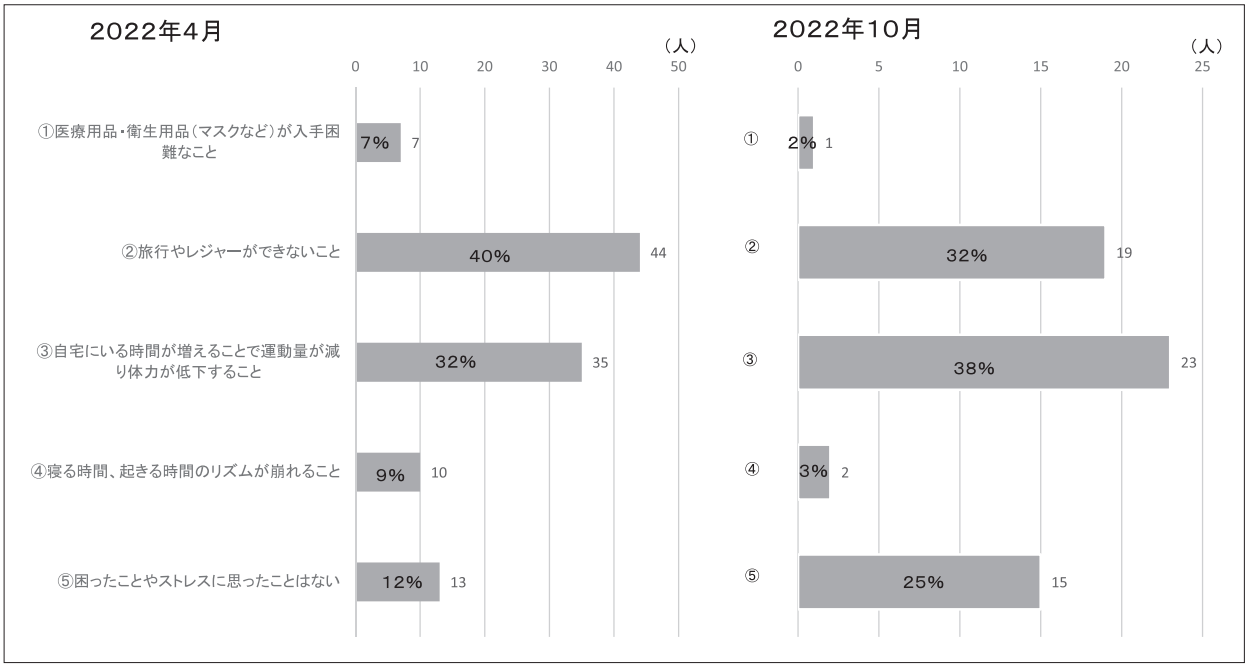
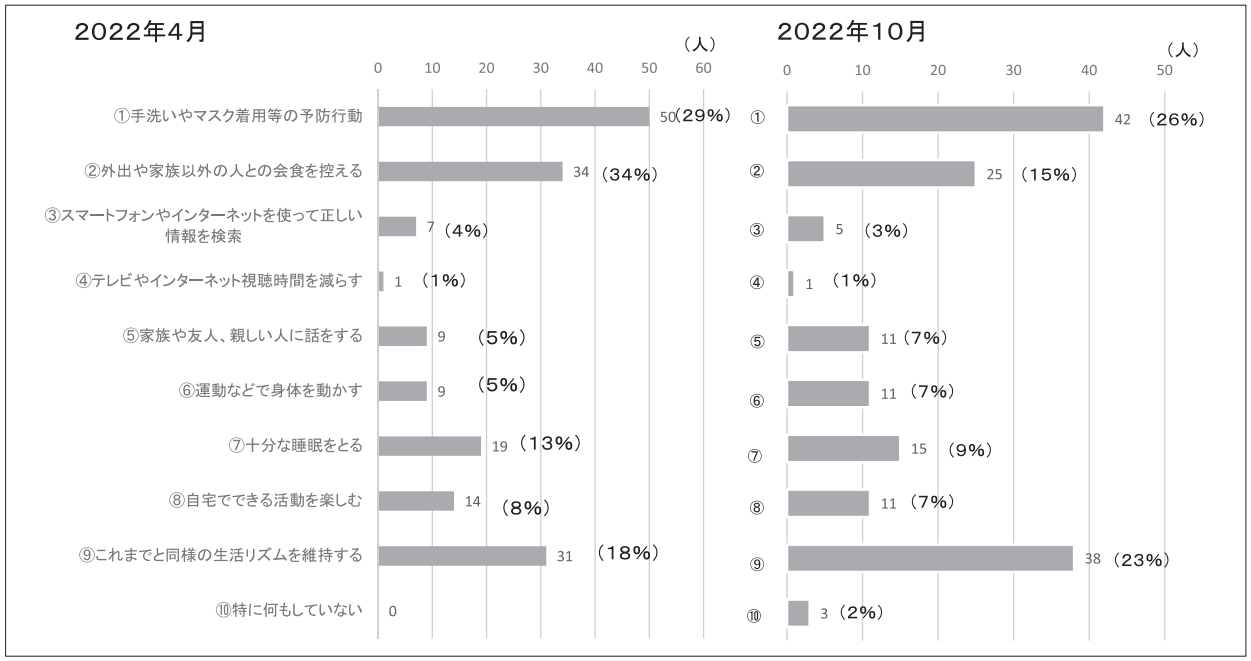


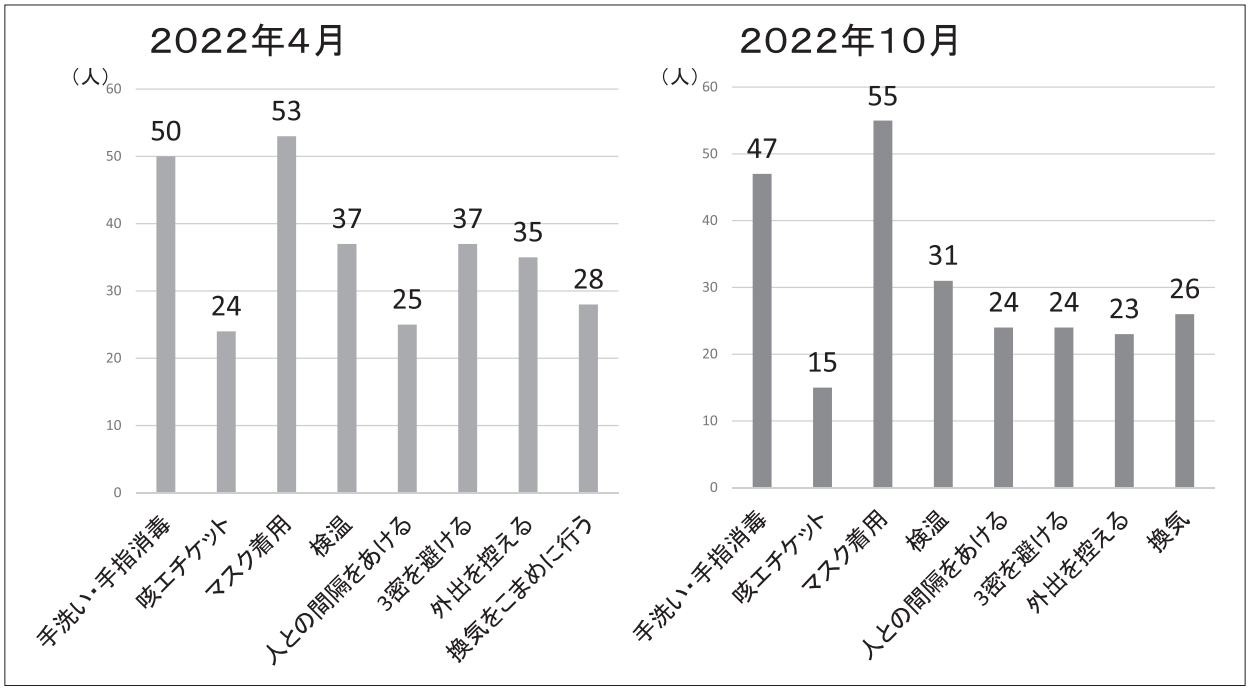
表５　過去１か月で、不安やストレスを解消するために行ったこと、行っていることで当てはまるものはありますか（複数回答）



不安やストレスを解消するために行ったこと、行っていることでは、②の外出や家族以外の人との会食を控えるが４月は34％、10月は15％で減少がみられた（表５）。

予防対策では、４月、10月ともに手洗い・手指消毒、マスク着用に90％以上の患者が回答した。３密を避ける、外出を控えるが10月は大幅な減少がみられた（表６）。

表６　感染予防対策で行っていること全て選んでください（複数回答）



今回、以前と比べ気持ちや行動に変化がありますか、と新たな質問を作成した。変化があるが、男性が39名中18名で46.1％、女性が28名中11名で39.2％だった。また、気持ちの変化では、気持ちに緩みが出てきたと思うと、ストレスが前よりなくなったと思うが同数の13名だった。行動の変化では、外出の回数が増えたが７名だった。また、以前よりも気を遣うようになったも７名だった（表７）。

表７　気持ち、行動の変化

＜気持ち＞	
気持に緩みが出てきたと思う	**男性8名女性5名**
ストレスが前よりなくなったと思う	**男性8名女性5名**
前よりストレスを感じるようになった	男性1名女性0名
気持には変化はない	男性1名女性1名
＜行動＞	
外出の機会が増えた	**男性3名女性4名**
家族以外の人と会う機会が増えた	男性1名女性0名
マスク着用の回数が減った（前より外すことがある）	男性4名女性1名
人との間隔や密集場所にあまり気を遣わなくなった	男性3名女性1名
以前よりも気を遣うようになった	**男性4名女性3名**
行動の変化はない	男性3名女性2名

＜考察＞

Ｋ６ストレスチェックでは、気分不安障害相当とされる９点以上が15名から７名に、重度精神障害とされる13点以上が６名から１名と大幅に減少がみられた。ストレスの度合いも５未満の患者が増え、ストレスと感じない患者の割合も増加した。感染者の減少によるものとも考えられるが、患者のストレスの把握に努め、傾聴を心掛けた患者に寄り添う姿勢の看護援助を行ったことで、患者は看護師に思いや考えを表出でき、ストレスの軽減に繋がったと考える。患者が伝えようとすることを上手く受け取り、フィードバック出来るようにコミュニケーションスキルを高めていくこと、

また、その情報を共有しチームで援助していくことで、より効果的な援助ができると考える。

気持ちや行動に変化がある患者は約半数で、外出の機会も増えていることも把握できた。その一方で、約半数の患者がいままでと変わらない生活を送っていることが分かった。当施設は、男性71.1歳、女性71.4歳と高齢化が進んでおり、感染拡大や感染者減少に左右されない年齢層が多いことも要因の１つと考えられる。行動に変化がある患者もそうでない患者も感染予防行動を維持し、安定した透析生活を送れるよう患者指導、啓発活動していく必要があると考える。

＜結語＞

Ｋ６ストレスチェックを含むアンケート調査により、普段の会話からは把握できなかったストレスに気づくことができ、看護援助につなげることができた。効果的な患者ケアができるようコミュニケーションスキルを高め、チームで援助をしていくことが大切である。

＜利益相反＞

本研究に関連し開示すべきCOIはない。

＜文献＞

１）渡邉明日香：COVID-19に対する当施設透析患者の意識現状調査、第25回日本腎不全看護学会学術集会抄録集：153、2022.

２）Kessler RC, Andrews G, Colpe LJ, et al： Short screening scales to monitor population prevalences and trends in non-specific psychological distress. Psychol Med, 32: 959-976、2022.

３）川上憲人、近藤恭子、堤明純、他：うつ病・自殺予防対策のためのスクリーニングツールとしてのＫ６/K10調査票の妥当性、日本公衆衛生学会総会　抄録集 64：85、2006.

４）古川壽亮、大野　裕、宇田英典、中根允文：一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングツールに関する研究、厚生労働省科学研究費「心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究」研究協力報告書：１-４、2003.

５）厚生労働省・援護局　障害福祉部精神・障害保健課、新型コロナウイルス感染症に係るメンタルヘルスに関する調査概要について、https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/syousai.pdf